

〈研究ノート〉

マリア・ライトナーが描いたアメリカ ——マリア・ライトナー著『女ひとり世界を旅する』『ホテル・アメリカ』について

Amerika hinter den Klissen. Zu Maria Leitners

„Eine Frau reist durch die Welt“ und „Hotel Amerika“.

田丸 理砂

Risa TAMARU

1. はじめに

ワイマール共和国時代の「新しい女 (die Neue Frau)」のイメージのメルクマールはその「動き」である。彼女たちは職場へと町なかを駆け、オフィスでその指はタイプライターの上で上下左右の運動を繰り返し、仕事が終わるとダンスやスポーツで身体を動かすことを楽しんだ。

彼女たちの「動き」の舞台となったのは、ただし、こうした活動を可能にしたベルリンに代表される大都市だけではない。第一次世界大戦後には、「世界」をタイトルに付した数々の旅行記が女性によって発表されている。たとえば自動車による世界旅行を敢行したクレレノーレ・シュティネスClärenore Stinnesの『自動車でふたつの世界をめぐる (Im Auto durch zwei Welten)』¹

1 ドイツの大実業家フーゴ・シュティネスの娘、クレレノーレ・シュティネスは1927年から1929年にかけて、自動車でヨーロッパ⇒トルコ⇒アラビア半島⇒ソ連⇒シベリア⇒モンゴル⇒中国⇒日本⇒ハワイ⇒北米⇒南米 (ペルー、アルゼンチン、チリ) ⇒北米⇒ヨーロッパを旅行した。Vgl. Clärenore Stinnes (1929/1996/2007).

(1929)、エーリカ・マンとクラウス・マンきょうだいの旅行記『至るところに——世界旅行という冒険 (Rundherum. Abenteuer einer Weltreise)』² (1929)、そして本稿で取り上げるマリア・ライトナー Maria Leitner (1892-1942) によるルポルタージュ『女ひとり世界を旅する (Eine Frau reist durch die Welt)』(1932) などである。「動き」はまた「世界」という語が示唆する長距離移動も意味するのだ。

ところでマリア・ライトナーが旅した「世界」とは、シュティネスやマンきょうだいとは異なり、アメリカ大陸に限定され、北米、中南米の国々および当時ヨーロッパ諸国に植民地支配されていた島々である。1925年から1928年までの3年間、ライトナーは潜入取材の手法をとり³、さまざまな仕事に就きながら合衆国を旅行し、労働者の視点からアメリカ社会をとらえようと試みた。また1930年には今度はジャーナリストとして彼女は、フランス領ギアナ、当時のオランダ領ギアナ (現スリナム共和国)、イギリス領ギアナ (現ガイアナ共和国)、ヴェネズエラ、キュラソー、アルバ、プエルトリコ、ハイチを訪ねている。ライトナーの書いたルポルタージュは随時、おもにウルシュタイン社の新聞、雑誌等にルポルタージュとして掲載されたが⁴、これらをまとめて書

2 1927年、トーマス・マンの娘エーリカ、息子クラウスはアメリカ合衆国、ハワイ、日本、韓国、ソビエト連邦の旅行に出掛けた。Vgl. Erika und Klaus Mann (1929/1993).

3 Helga Schwarzは、ライトナーが『マッドハウスでの10日間』(1887) や『72日間世界一周』で知られるアメリカのジャーナリスト、ネリー・ブライ Nelly Bly の影響を受けていると指摘している。ブライは1887年、ニューヨークのブラックウェル島精神病院に精神病を装って入院し、潜入取材を行い、評判を呼んだ。Vgl. Nachwort von Helga Schwarz., Bibliografie der Texte der Jahre 1925-1933. In: Leitner (2017), S. 383. グッドマン (2013) 57-67頁参照。

4 Vgl. Nachwort von Helga Schwarz., Bibliografie der Texte der Jahre 1925-1933. In: Leitner (2017), S. 381-384, S. 400-408.

籍として刊行したのが『女ひとり世界を旅する』である。なおライトナーは1930年、北米での経験をもとに小説『ホテル・アメリカ (Hotel Amerika)』を上梓している。

以下本論では、まずマリア・ライトナーのルポルタージュ『女ひとり世界を旅する』に収められたアメリカ合衆国の旅を取り上げ、ライトナーが注目したアメリカ的特徴を明らかにし、その上で、この旅行の体験に基づいて執筆された小説『ホテル・アメリカ』を考察したい。また最後に本論と関連して、今後の課題についても言及するつもりである。

なお以下ではライトナーのアメリカ合衆国を舞台とした作品を扱うが、その際、「アメリカ」という語をアメリカ合衆国の意で使用する。

2. 『女ひとり世界を旅する』

1925年3月18日、マリア・ライトナーは、客船チューリンジア号でニューヨークに到着する。アメリカ訪問のそもそもの目的は、肺病で重篤な状態にある合衆国在住の弟ヨハン⁵を見舞うことであつたが、旅行に先立ちライトナーはベルリンの大手出版社ウルシュタイン社⁶に、労働者の視点からとらえたアメリカについて

5 ライトナーにはマクシミリアンMaximilian (1895-1925) とヨハンJohann (1895-1925) がいたが、ふたりとも1918年に起きたハンガリー革命の推進メンバーだったので、革命政府崩壊後、彼らはハンガリーを離れることを余儀なくされ、マクシミリアンはウィーンやベルリンなどヨーロッパ各地を転々とし、ヨハンは1922年偽名を使って、アメリカ合衆国へと渡った。Vgl. Nachwort von Helga Schwarz. In: Leitner (2017), S. 374-376.

6 ワイマール共和国時代、モッセ社、シュル社と並ぶ、ベルリンの三大出版コンツェルンのひとつ。なかでもウルシュタインはヨーロッパ最大の出版社で、1920年代の終わりには日刊紙5紙、週刊新聞／雑誌4紙、その他の定期刊行雑誌9誌を発行していた。Vgl. King (1988), S. 50f.

のルポルターージュ執筆を申し出ている。ウルシュタイン社との契約は、彼女が合衆国に長期滞在するための在留許可取得に必要なものだった。出版社へのこうした提案の背景には、おそらく重病の弟の世話が念頭にあったことが推測されるが、結局ヨハンは、ライトナーのアメリカ到着から4か月後の1925年7月17日に亡くなっている⁷。

弟の死後間もなく、ライトナーはジャーナリストとしての活動を開始したようだ。彼女の合衆国についての最初のルポルターージュ「ヨーロッパに飽いた人たちのメッカ——世界最大のホテルの掃除婦として」はウルシュタイン社の雑誌『みみずく (UHU)』(12号、1925年9月発行)に掲載されている⁸。

2. 1. 最初の仕事——ニューヨークの世界最大のホテルで働く

合衆国に来たばかりのライトナーはニューヨークで2200室を備える当時世界最大のホテル、ホテル・ペンシルヴェニアに清掃係として採用される。担当者から受けた説明によれば賃金は一日1ドル、住居(バスルーム付きの部屋)と食事はすべてホテルから支給とのこと。出勤初日、掃除用具を受け取り、作業を教わり、一仕事終わると、社員食堂での昼食の時間になる。そこでライトナーは職種によって制服が異なるだけでなく、職種間には明確な階層差があり、食事をとる部屋も別々であることを知る。昼食の後、彼女は、今度は22階の舞踏会用ホールの柱みがきを任せられ、会う人会う人にあいさつ代わりに「どう、気に入った」と仕事のことを聞かれ辟易するも、その一方で、作業のペース配分がよく分からず戸惑っていると、あんまり一所懸命やり過ぎないで適当にやった方がいいという同僚たちの言葉にひどく助けられもす

7 Vgl. Nachwort von Helga Schwarz. In: Leitner (2017), S. 383f.

8 Vgl. Uhu, 1924/25, H.12, September (arthistoricum.net), <https://www.arthistoricum.net/werkansicht/df/73433/150/1/1> (2021/01/07閲覧)

る。彼女たち曰く「ただひたすらゆっくり」が肝要とのこと、「彼らが求めるテンポで仕事をしたら、働きすぎて死ぬほどくたくたになってしまう」というのだ⁹。

22階で作業するライトナーを、ホテルで働くアイルランド人の男性は、「さあ、見てごらん」と彼の愛するニューヨークの町の眺めへと誘う。けれどもライトナーは彼のニューヨーク愛を共有できない。その代わりに彼女が見出すのは「デパート、工場、銀行、オフィスビルのとてつもない大混乱、どこもかしこも仕事、人間、せわしなさ」である¹⁰。

ライトナーは彼女に提供された従業員の宿泊施設、つまり住環境についても報告している。彼女たちの部屋はまるで「重病患者用の病室」のようだという。部屋には容易に移動可能なキャスター付きの幅の狭い軽いベッドが5台、ブリキ製の棚とタンスが二つ、昔からの住人たちの持ち物のロッキングチェアが二脚、そしてきれいなバスルームが備えられていた。そこで同居人たちはといえは死んだように休んでいる。ライトナーのとなりのベッドの住人は1年前にアイルランドから来て、今の生活に満足しているという。チップ込みで月30ドルしか稼げないのに¹¹。その他、ライトナーが出会ったのは、人生に多くを期待してはいけないと言うアメリカ生まれのドイツ系女性や、おしゃれで一日に何度も着替え自由時間になると淑女へと変身する浴室の清掃係など。しばらくしてライトナーがホテル・ペンシルヴェニアを辞めると言うとき、彼女は同ホテルで何年も働く女性たちから質問攻めにあう、いい仕事なのにもったいないというのである¹²。

9 Vgl. Leitner (1932/2013), S. 5-10.

10 Vgl. ebd., S. 10.

11 なお本書に出てくる他の職業で支給されている賃金は、たとえば自動販売機式レストランでは週給14ドル、チョコレート工場では時給24セント、洋品店の顧客監視役（万引き防止のため）週12ドル、リッチモンドの上院議員宅では住み込みの料理係として週6ドルなど。

これを皮切りにライトナーはアメリカ各地でさまざまな仕事に就き、ルポルタージュを記していく。

2.2. 「アメリカ的」仕事

ひしめく摩天楼 (Wolkenkratzer) もアメリカ、とりわけニューヨークを代表するイメージだが、『女ひとり世界を旅する』で扱われている仕事の多くは、二つの点できわめて「アメリカ的」だといえる。ある種の職場は旧世界ヨーロッパから見た新世界アメリカの合理的で機械化された近代的イメージと重なり、また別のいくつかは実際にアメリカに特徴的な仕事である。前者にはたとえば、次に論じる自動販売機式レストラン、また後者にはドラッグストアのウエイトレスや、禁酒法下の酒類密輸入業者宅での家政婦などが当てはまる。

自動販売機式レストランで働く

ホテル・ペンシルヴェニアの仕事に続いて、ライトナーは自動販売機式レストラン、ホーン&ハーダートで働き始める。ライトナーは自動販売機式レストランの様子を次のように記述している。

通り全部が自動販売機式レストランに流れ込む、朝から深夜まで。しかしここで食事を楽しむ人はいない。ここではロボットたちが食べている。ドイツ人、アメリカ人、ユダヤ人、中国人、ハンガリー人、イタリア人、黒人。

ここにはあらゆる人種がいる。世界中の言葉を耳にし、ヘブライ語、中国語、アルメニア語、ギリシャ語、その他、見当もつかないエキゾチックな言語の新聞も置かれている。〈…略…〉

けれども彼ら／彼女らは双子のようにそっくりだ。彼ら／彼

12 Vgl. Leitner (1932/2013), S. 11-16.

女らはみな同じ安物の衣服、同じシャツ、同じセール品の靴を身につけ、来る日も来る日も同じトマトスープ、同じサンドウィッチ、中味はハムとレタスカ卵とレタスカチーズとレタスカ鰯とレタス、を食べ、同じ週給を稼ぎ、彼ら／彼女らはみな同じくきつい長時間の仕事をしている。

大部分のロボットたちは立ったまま食べ、座るとしても、機械のメンテナンスに必要なカロリーとビタミンを摂取するまでの間である¹³。

コインを挿入し、ガラスケースに入った食べ物を客自ら取り出す（セルフサービス式）、自動販売式レストランは、世界各地からチャンスを求めてアメリカにやってきた人たちにとって安価で効率的に食糧補給する場であるだけでなく、同郷者と出会う場でもあった。その一方で、出身地や言葉はそれぞれ異なるけれど、彼ら／彼女らの外見はそっくりだ。そうした彼ら／彼女らをライトナーはロボットたちと呼び、彼ら／彼女らのレストランでの食事を「機械のメンテナンス」という。

ところで、ワイマール共和国時代末期に発表されたイルムガルト・コインの小説『偽絹の女の子』（1932）では、ベルリンにできた自動販売機式レストランが登場するが、それは主人公のドーリスにとって、とても「アメリカ的」で特別なものである。ある日、ドーリスは自動販売機式レストランで人との待ち合わせをする。

わたしはヨアヒムターラー通りの自動販売機式レストランにいて、それは「クイック」って言う。なんてアメリカ的。
〈…略…〉

そしてわたしは今クイックにいて——わたしは自動販売機が

13 Ebd., S. 18

すごく好きで、エビとウェストファリア風ベーコンを引き出す——なんてたくさんの食べものがあるんだろう、なかでも遠くの場所の名前のついてるのが一番おいしい、というのもドイツ人でもいつだって旅行気分を味あわせてくれるし、特別なものを与えてくれるから¹⁴。

ドーリスは、ベルリンの自動販売機式レストランに興奮気味である。料理そのものというより、こうした機械を介したセルフサービスのレストランはドイツでは珍しく、とてもアメリカ的で、ドーリスを特別な気分にしてくれるからだ。

元々は功利的な理由から生まれたアイデアであっても、それが他国に輸入されることで、輸入先のイメージと相俟って高級化するということは、わたしたちも日常的に経験していることだ。ただここでさらに興味深いのは、自動販売機式レストランの発祥の地は実はドイツだったということである。1896年にドイツ自動販売機協会がベルリンに自動販売式レストランを開店し、その後間もなくしてドイツの大きな町には同様の店が次々と誕生した。アメリカ人のフランク・ハーダートがベルリン訪問の際に、ここから新しいビジネスのアイデアを得、1902年、ビジネスパートナーとともにオープンした店は、やがて180店舗にも及んだ。1920年代にはドイツの自動販売機式レストランは下火になる一方で、ハーダートらの店は世界展開していく¹⁵。上記引用箇所では「アメリカ的」クイックにドーリスは感激しているが、自動販売機式レストランのアイデアは逆輸入されたものだと思うと、この場面

14 Keun (1932/1993), S. 130f.

15 Vgl. Solveig Grothe: Automatenrestaurants: Kurbel drehen, Wurst entnehmen. In: Der Spiegel. (15/08/2013), <https://www.spiegel.de/geschichte/automatenrestaurants-kurbel-drehen-wurst-entnehmen-a-951231.html>. (2021/01/07閲覧)

は一気にアイロニーを帯びてくる。

自動販売機式レストランのアメリカ的イメージと似た例として、同じく1920年代から1930年代に流行った集団でメカニックな動きのダンスを踊るレビューガールズが挙げられるだろう。イギリス、マンチェスターの実業家が考案したレビューガールズ(ティラーガールズ)は、アメリカのレビュー、ジークフェルド・フォーリーズによって一躍有名になり、ワイマール共和国時代にはそれはきわめてアメリカ的なものとしてとらえられ、人気を博すのである。第一次世界大戦後の女性の目覚ましい活躍に認められるアメリカの影響について、批評家のフリッツ・ギーゼは『ガール文化——アメリカとヨーロッパのリズムと生の感情の比較』(1925)のなかで論じている¹⁶。そして自動販売機式レストランやレビューガールズに共通しているのは、集団(大衆)および機械のイメージである。

ドーリスの目に「アメリカ的」と映ったのが自動販売機式レストランのファサードだとしたら、他方、ライトナーが働くのはその背後である。彼女がそこで指示された仕事はバスガールbus-girlと呼ばれ、その役目は客のテーブルに立ち寄り、使用済みの食器を回収することだった。レストランのシステム同様にそこで働くものたちも自動機械と化す。

けれども自動販売機の後ろの、狭くて暑い通路にも、人知れず自動機械がいる。彼ら／彼女らはサンドウィッチを皿に置いたかと思えば、また新しいのをのせ、ケーキやコンポートを配分する。彼ら／彼女らはサモワールに紅茶やコーヒーを満たし、スープ、野菜、肉を取り分ける。

16 レビューガールズとアメリカ的イメージについては、拙書、田丸理砂(2015)、41-46頁を参照していただきたい。

わたしたち別の自動機械は重いトレイを持って、何度も何度も汚れた食器を片付け、それは5分ごとにテーブルの上にまた山積みになる¹⁷。

ただしテーラー主義やフォード・システムに代表される、労働者の科学的管理や機械による人間の支配という点からアメリカを批判すること自体は、取り立てて珍しいことではない¹⁸。ライトナーのルポルタージュにそれとは別の特徴があるとすれば、上記で「自動機械」とか「ロボット」と描かれている人びとを集団として扱わず、むしろ個々の人間として取り上げていることにあるだろう。たとえばさっきまで完璧な自動機械と化した女性も急に人間の顔を覗かせる。二年前にドイツのザクセン地方からアメリカに来たこの女性は、ごくごく一般的なドイツの小市民的な女性なのだが、アメリカに来てからこれまで従事していたメイドの仕事と比べれば、自動販売機式レストランの仕事は天国だと言った上で、ただし比較的質素な天国と付け加えている。英語が一言も話せないロシア人女性は、少し休んでは、新聞から切り抜いた女性の写真を見つめ、気を取り直して仕事をはじめ。小柄なスペイン女性は給料で大きなイヤリングを買っては、店の前で男性と一緒にの場所を見られては、そのたびにセンセーションを起こす。またわずかな注文で何時間も粘ろうとする客に向けるライトナーの眼差しもやさしい。いつもコーヒー一杯で本を読んでいる若者

17 Leitner (1932/2013), S. 19.

18 たとえばジークリート・クラカウアーは『大衆の装飾』のなかで、メカニクな動きと集団性が目を引くレビューガールズの出現について「このアメリカの娯楽工場の製品はこの女の子なのではなく、分解できない女の子の集合体であり、その動きは数学的に正確なデモンストレーションである」と指摘し、そこに人間が文様を形成する断片に過ぎなくなる、合理化をきわめたアメリカ的大衆社会の特徴を見出している。Vgl. Kracauer (1977), S. 50.

は、カップを片付けられまいとコーヒーを飲みきらないように気遣っているのだが（片付けられると用済みと退店を迫られる可能性がある）、ある時、カール・マルクスの『フランスの内乱』を読んでいて、コーヒーをすっかり飲み干してしまう。彼がカップを片付ける片付けないで従業員と攻防を繰り返す場面がユーモアたっぷりに語られている¹⁹。

自動販売機式レストランについてのルポルタージュでは、最後に床掃除をしている男性の嘆きを書き留めている。

「ここは素敵なんかじゃない。これ以上働くななんてほとんど不可能だ。毎日12時間仕事をして、さらに休憩時間が1時間半、着替えに半時間、通勤に1時間。これで毎日15時間になる。日曜日もけっして休まない。もう1年半前から、途切れなしだ。でももしも一日休みを取れば、稼ぎは減ってしまう。そしてもしも仕事をしなければ、金を使うだけだ、それに食費もかかる。なぜ働くかって？金を貯めたいから。それ以外に何があるんだ。それじゃあなぜ金を貯めるかって？独立したいから。でもここは素敵なんかじゃない。いつもいつも床を、汚れたところを掃き続ける。世の中の他のものははや見えやしない。これ以上やっっていけるか、わからない」²⁰

このように彼は働く日常に絶望しながらも、そこから抜け出せずにいる。一方ライトナーはといえば、理由もなしにそうしょっちゅうしょっちゅう仕事を辞めるのは「フェア」ではないという批判を尻目に、レストランから最後の給料を受け取ると店を立ち去る前に、念願だったことを実行に移す。彼女は自らコインを挿

19 Vgl. ebd., S. 19-21.

20 Ebd., S. 23f.

入し、自動販売機式レストランに客として腰をおろし、コーヒーを飲んだ²¹。

2. 3. 「道中メモ」——旅を通しての所感

この後ライトナーはニューヨークでチョコレート工場の工員、酒類密輸入業者宅の家政婦、洋品店で万引き防止のための顧客監視係として働いた後、アメリカの地方へと足を伸ばす。以下に『女ひとり世界を旅する』に記された、ニューヨークを離れてからライトナーが就いた職と場所を順に挙げる。

- ・ドラッグストアのウエイトレス（ペンシルヴェニア州の人口10万弱の町、具体的な名は記されていない）
- ・煙草工場の工員（場所は不明）
- ・葉巻工場の工員（フロリダ州タンパ）
- ・高級ホテルのウエイトレス（フロリダ州パームビーチ）
- ・大邸宅の調理場手伝い（フロリダ州パームビーチ）
- ・町の旧家の名士宅の料理人（ヴァージニア州リッチモンド）
- ・町の最大ホテルのメイド（ヴァージニア州リッチモンド）
- ・高級スポーツクラブの従業員（ノース・カロライナ州サザンパインズ）
- ・紡績工場（ジョージア州のどこか、綿工場の企業村）
- ・高級ホテルの厨房の手伝い（サウス・カロライナ州チャールストン）

このように職を転々としながらアメリカを旅するライトナーが感じたこと、疑問点は、『女ひとり世界を旅する』のなかに収められた「道中メモ（Kleine Aufzeichnungen unterwegs）」に、

21 Vgl. ebd., S. 24.

コンパクトにまとめられている。彼女がここで言及しているのは、主としてアメリカにおけるジェンダー観、労働、スポーツと階層、黒人問題である。

あらゆる領域で女性と男性は空間的に分けられている。大きな会社の場合、社員食堂は男女別々の部屋で、工場の場合、女性の座るテーブルには白いテーブルクロスが敷かれていた。ライトナーがひとりで郊外の映画館に行くと、しばらくして座席案内係が彼女のもとにやってきて、となりの男性が連れかどうかを尋ねる。彼女が違うと答えると、男性は2席分空けるように求められた。安宿はきまって男性専用か、女性専用だという²²。

労働についてライトナーが指摘しているのは、専門職に対する敬意の欠如である。ホテルやオフィスでは、短い説明だけでその仕事に不慣れな人を教え込み、彼ら／彼女らがうまくいかないと文句を言えば、即解雇される。また工場では作業に必要最低限のことだけ教えられ、操作している機械についての説明を求めると、回答の代わりに、自分の仕事だけを気にしろ、と言われる。ルポタージュではライトナーが大きな製靴工場で働くもすぐ解雇された経験も記されている。ある日、停電が原因で機械がストップした際に、ストライキが起きたという噂が広まった。事情のわからぬライトナーが隣で働くアメリカ人女性に、ストライキが宣言されたら、作業を止めるかどうかを尋ねたことが解雇の理由だった。彼女はオフィスに呼ばれ、「喋りすぎだ、うちには必要ない」と言われる²³。

上記のようにライトナーは高級スポーツクラブでも働いた経験があるが、スポーツと階層の関係性はひどく彼女の関心を引いたようである。

22 Vgl. ebd., S. 94f.

23 Vgl. ebd., S. 96f.

スポーツをするのはごく一部の上流階級だけだ。裕福な市民層はゴルフをたしなみ、カントリークラブの会員で、妻もプレイすることもあるが、それはごくまれなことである。テニスはあまり人気がない。大都市には労働者の運動場はなく、もっと土地に余裕のある地方でだけ、工場で働く若者のスポーツクラブが組織されている。ニューヨークに住む平均的人間の唯一の運動といえば、地下鉄の階段の上り下りである²⁴。

同時期のワイマール共和国時代のドイツでは、階層間で行われるスポーツに違いはあるものの、スポーツは広く社会現象の一つであった。ドイツの地方都市の若者を描いた、マリールイーゼ・フライサーの小説『小麦売りのフリーダ・ガイアー (Mehltreisende Frieda Geier)』の副題は「喫煙、スポーツ、恋愛、販売の物語 (Ein Roman vom Rauchen, Sporteln, Lieben und Verkaufen)」という。この小説には町の水泳クラブが登場する。クラブのメンバーは町の煙草屋の息子や、パン屋の見習い職人などだ²⁵。またベルリンのオフィスで働く若い女性たちも週末には郊外でハイキングや水泳を楽しんでいた。ライトナーの驚きは、こうした背景と関係しているだろう。

ところでライトナーがアメリカで大きな衝撃を受けた一つに、黒人差別の問題がある。とりわけ南部での黒人の扱いにショックを受けたようである。「道中メモ」とは別の箇所、彼女はある種の奴隷制がまだまだ続いていることを目の当たりにした経験を語っている。ライトナーはワシントンで女子大生モードをおしゃれに着こなした優秀な黒人学生と知り合う。彼女はドイツ語もよくでき、現代語を専攻し、大学教授を目指していた。ライトナー

24 Ebd., S. 97.

25 Vgl. Fleißer (1931). またこの作品におけるスポーツというモチーフについては、拙書、田丸理砂 (2015) 280-282頁を参照していただきたい。

が偶然家族のところに帰る彼女と一緒に、列車でワシントンからリッチモンドに向かうことになるが、当地に到着すると、ライトナーは黒人学生に待合室の前に書かれた「白人女性専用」という大きな文字に注意を促される。学生はライトナーと会わないように、即座に姿を消してしまう²⁶。

ライトナーはこのアメリカ滞在から二年後、自らの体験をもとにニューヨークの巨大ホテルを舞台とした小説『ホテル・アメリカ』を発表する。この小説の構想には、もちろん彼女自身がホテルで働いたことも影響しているだろうが、しかし、それよりもホテルという空間のユニークさこそが、彼女を執筆に駆り立てたのではないだろうか。さまざまな階層、世界中の国々からアメリカにやってきた人びとがホテルには集う。ライトナーは小説という形式を使って、彼女の見たアメリカ社会を描き出す。次章ではこの『ホテル・アメリカ』について考察したい。

3. 『ホテル・アメリカ』

小説『ホテル・アメリカ』ではニューヨークのホテル、ホテル・アメリカのとある一日が描かれている。物語は、始業前のホテルの女性従業員宿舎の朝の支度の場面からはじまる。主人公は6年前から母親と一緒にホテルで働く、洗濯物係のアイランド出身のシャーリーである。彼女は代わり映えのない貧しい暮らしに嫌気がさし、金持ちの恋人とホテルの宿舎を出ていくことを決意し、母や同僚の前で「今日が最後の日、今度来るときは客として」と宣言する。同僚は驚き、母親は娘に相手は誰なのか問い詰めるも、シャーリーは恋人の名は明かさない。結局のところ、シャーリーのもくろみは期待通りには進まない。物語半ばで、従業員食堂で

26 Vgl. Leitner (1932/2013), S. 111.

腐ったジャガイモを提供されたことをきっかけに、従業員は騒然となるが、その際、シャーリーひとりが人事部長に公然と刃向かったことが原因で、彼女はホテルを解雇され、住処でもあったその場所を去ることになる。ただし、ホテルを後にするシャーリーの気持ちは、すがすがしい。

3. 1. ホテルの仕事を具体的に描く

この作品の特徴のひとつはホテルでの仕事の内容や職種間の階層が詳述されているところにある。シャーリーが主人公といったが、19章から構成される物語の中には、彼女がまったく登場しない章もあり、シャーリーの仕事以外についても丁寧に描かれている箇所が散見される。たとえば第8章の冒頭ではボーイの仕事について以下のように記述されている。

専用の部屋でボーイたちは指示が来るのを待ち受ける。全員が壁沿いのベンチに座っている。けれどもこの着席は休息とはほど遠い。上半身を前にかがめ、右手は膝の上に置き、両脚はすぐにも飛び出せる体勢を整え、こうして彼らは自分の番号が呼ばれるのを待っている。

部屋の真ん中の少し高くなった場所にボーイのリーダー、“head bellboy”が鎮座している。彼の前にはリストと電話機が置かれている。彼は受話器を耳に当て、リストに印を付け、番号を呼ぶ。

「28番、フロント」

「承知しました」

28番はさっと立ち上がる。

彼にはわかっている、新しい客が到着したこと、彼が小さなトランクを運ぶこと、そして10セントのチップをもらうであろうことを、ひょっとしたら、運がよければ、1/4ドル、ついて

なければ、なにももらえない。それから彼はまたこの部屋に駆け戻り、再び自分の番号が呼ばれるのを待つだろう。彼は急ぐだろう、というのもリーダーのペンは要した時間も正確に計算しているから。

「35番、1228号室」

35番はさっと立ち上がる。

「承知しました」

ボーイたちはまたとても小さな声でお喋りをする。彼らは唇をほとんど動かさず、ほとんど聞き取れない声で話すすべを身につけている²⁷。

こうした描写は物語の展開とはほとんど関係がないが、これにより読者はホテルの仕事を具体的に感じ取ることができる。おそらくホテルの仕事の一つひとつを文章で再現することも、もちろん到底、網羅はできないのだけれども、また著者の意図なのだろう。職業の叙述の仕方は、先の『女ひとり世界を旅する』とも共通し、ライトナーのジャーナリストとしての能力が存分に生かされている。あるいは当初より、ホテルの仕事を入念に描くために、物語の中の進行時間は一日と設定したのかもしれない。つまり、シャーリーの物語はこの時間的条件にあわせて構想されたと考えられることもできる。

3.2. 職種間の階層、ジェンダー、「人種 (Rasse)」

『ホテル・アメリカ』のクライマックスは、職場で最下層の女性たちがちょっとした反乱を起こす、第9章の従業員食堂での昼食の場面である。

食事の場所は、職位、ジェンダー、「人種 (Rasse)」によって

27 Leitner (1930/2013), S. 82.

それぞれ異なる。ヒエラルキーのトップは部長職に就く者たち。彼らは従業員というより、大切な客のような扱いを受ける。彼ら専用の食堂には柔らかい絨毯が敷かれ、洗練されたウエーターがサービスをし、食器には高級陶器やクリスタルが使用されており、メニューに載っているあらゆる種類の料理が提供される。第二番目のカテゴリーに分類されるのは上級事務職にある人たちで、白をまとったウエイトレスがサービスを行う。料理はおいしそうだが、食器や調度品の質もトップの人たちよりぐっと落ちる。続く中級事務職はセルフサービスで、キレイに磨かれたトレイに自分で料理を取る。提供される料理の選択の幅は大きくない。食器には傷の入ったものもあり、テーブルクロスには染みがある。使用済みの食器はウエイトレス見習いが片付ける。次のグループは、下級事務職、各フロアのサービスの責任者の女性、電話交換手、速記タイピスト、ティールーム、清涼飲料コーナーのウエイトレス。彼女たちはもちろんセルフサービスで、食事に選択肢はなく、出されたものを食べることになっている。それでも最下層の人たちと比べるとまだある種の上品さがあるという。そして最後が最下層の白人女性労働者たちである。もっとも黒人女性たちは隣のもっと小さな部屋で食事をするところになっているのだが²⁸。

この最下層白人女性たちの食堂は、配膳台と洗い場や残飯捨て場が近接しており、通気の悪さも相俟って、悪臭を発している。また食事には、ブリキのトレイにうわぐすりの取れた使い古しの食器が使用されている。料理はきまってスープと皮付きのジャガイモ。粗末な食事ではあるが、ここで食事をとる多くの人たちにとって、昼食は一日で一番重要な栄養摂取の場である。そのジャガイモが腐っていて、女性たちは騒ぎだし、それを聞きつけた別の階、別の部屋で食事している人たちも彼女たちの食堂に集まり

28 Vgl. ebd., S. 86f.

はじめ、最後には事態を收拾すべく人事部長が乗り出してくる。

人事部長は騒いでいた人たちが、個人として苦情を申し立てることを求めるのに対し、従業員側は、誰かが彼女たちを代表して発言することを要求し、経営側と従業員側の話し合いは平行線をたどる。部長にとっては誰かを解雇することは金の問題に過ぎないが、彼女たちにとっては生死に関わる問題である。やがて部長はこれ見よがしに腐りかけのジャガイモとまずいスープを食べてみせる。彼女たちの不満に対し、一見物わかりのような態度を見せながらその言葉の端々に脅迫をにじませる部長に面と向かって、シャーリーは批判の言葉を投げつける。すると彼は昼食の食べ残しであふれたテーブルや、パンくずやぐちゃぐちゃになったジャガイモが散乱する床に目を向け、この部屋が汚いのは経営側のせいではない、自分たちできれいにすべきと言う。するとシャーリーは以下のように反論する。

「部長、わたしたちのせいみたいな態度をとらないでください。部長はジャガイモの皮を床に捨てたりはしないでしょ。それどころか皮をむく必要などないでしょう。お金持ちがどんなふう食べるかはよく知っています。それはわかっています、わたしたちにも目はありますから。わたしだってデザートの前にフィンガーボールやレースのハンカチを使って、部長みたいに、上品に食事をしたことはあります。でも豚のエサみたいな食べ物を与えられたら、豚みたいに食べるしかありません。だってジャガイモの皮をどうすればいいんです？わたしたちには場所がないんです、わたしたちはこのたいそうな肘掛け椅子にぎゅうぎゅう詰めに座っているんですから」。²⁹

29 Ebd., S. 102.

経営者側はあくまでも彼女たちの自己責任だと主張するのに対し、シャーリーは人間並みに扱ってくれないのに、どうして人間らしくできるのかと返すのである。

ところでシャーリーがなぜこんなに強気になれるのかといえ、先にも述べたように彼女が「今日が最後の日」と心に決めているからである。彼女にはこれにより失うものはない。上記のような、従業員の食堂についての細かな描写、すなわち従業員間のヒエラルキーやメニュー、食器や調度品に至るまでの詳細な説明には、おそらくライトナー自身のホテルで働いた経験が反映されているのだろう。部屋に充満する悪臭、どのように食事が配膳されるかなどは、内部の人にしかわからない。とはいえ、こうした最下層の女性たちによる反乱のようなものが実際に起きたとは考えにくい。本当にあったのなら、センセーショナルなテーマとして旅行のルポルタージュに必ずや採用されたにちがいない。

シャーリーは貧しさに不満を抱き、黙々と働く母親や他の同僚たちのことが理解できないでいるが、それが社会的な問題だと突き詰めて考えたことはない。小説にはドイツから来たフリッツという青年が登場する。調理場の手伝いとして採用されたばかりの彼は、元々は熟練工（旋盤工）で、かつての勤務先で労働組合を組織しようとして解雇されたという過去を持つ。女性たちと経営者側との一触即発という場面を見た彼は、「まったく組織化されていない、まとまりのない大衆のこうした自然発生的なやり方はうまくいかない」³⁰と独りごちる。

ライトナー自身も、前章で述べたように「ストライキ」という言葉を出しただけで製靴工場を解雇されたことがあった。労働組合に対するアメリカでの過敏な反応には、労働運動に批判的な当時のアメリカの社会状況が関係しているのだろう³¹。だからこそ

30 Ebd., S. 101.

小説というフィクションの形式を使って、もともと労働運動に関心の高かったライトナーは、彼ら／彼女らの置かれた状況を社会問題として取り上げたいと思ったにちがいない。そこでアメリカの外からやってきた、フリッツというドイツ出身の男性を登場させ、シャーリーを社会問題へと誘うという仕組みを考え出したのだろう。とはいえ、この小説では教条主義的な語り口はほとんど用いられていない。物語の最後に、シャーリーは、金持ちだと思っていた恋人は、実は新聞社社主である、元恋人の大金持ちの父親から、その結婚式直前に手紙をネタに金をゆすり取ろうとしていたケチな男にすぎなかったことを知る。シャーリーは昼食時の大立ち回りが原因で解雇を申し渡され、当初とは思ってもよらぬ形で、ホテルを去ることになる。そしてこれにより彼女は気を落とすことはなく、フリッツや他の仲間を得、期待に胸をふくらませているというところでこの話は終わっている。

3.3. 『ホテル・アメリカ』

『女ひとり世界を旅する』の中で、ライトナーは『『ホテル・アメリカ』のないアメリカの町はない』と述べている³²。その真偽はともかくも、ホテルを舞台にアメリカ社会の階層、ジェンダー、「人種」の問題を描き出すために、アメリカのホテルおよびアメリカ社会の一つの典型として、『ホテル・アメリカ』というタイトルが選ばれたのだろう。

ところで当時のドイツ文学を代表するホテル小説といえば、何よりもまずヴィッキイ・パウムの『ホテルの人びと (Menschen im Hotel)』(1929)が挙げられる。『ホテルの人びと』ではベル

31 1920年代のアメリカでは、政府も企業も労働運動を反アメリカ的として抑圧したこともあり、労働組合の活動は停滞したという。有賀(2002/2012) 111-114頁、参照。

32 Leitner (1932/2013), S. 120.

リンの高級ホテルで出会うさまざまな人びとの人間模様が描き出されている。そしてこの作品を一躍有名にしたのは、1932年のアメリカでの映画化である。タイトルは『グランドホテル』と改められ、グレタ・ガルボ、ジョーン・クロフォードなど当時の錚錚たるスター俳優が出演した映画は世界的ヒットを収める。こうした成功にはホテルという舞台が大きく影響しているのは間違いないだろう。多様な人びとが行き交うホテルという空間は大都市を特徴づけるものであるが、この作品においてはベルリンという地名はたいした意味をもっておらず、どこか別の大都市と置きかえることも可能である。むしろ『ホテルの人びと』はその無国籍性という特徴ゆえにアメリカや世界の他の地域で成功したといえるのだ³³。

一方、ライターの『ホテル・アメリカ』はニューヨークという背景抜きには成立しえない。両者のこうした違いはそれぞれの作品が何に焦点を当てているかということと大いに係わっている。バウムの『ホテルの人びと』では宿泊客の運命の描写に重点が置かれ、ある場所から別な場所への通過点としてのホテルという場所がクローズアップされている。それに対して『ホテル・アメリカ』におけるホテルは、作品中もっともフォーカスされている最下層の白人労働者女性にとって、永遠に続くかに見える過酷な労働と生活の場である。そこではヨーロッパやアジアの各地から集まってきた人たち、そしてアメリカの黒人たちが働いている。他方、本稿では触れなかったが、小説では、ホテルの最上階の宴会場で行われている金に糸目をつけない派手な結婚式やその出席者である上流階級の人びとも登場するが、こうした場面はむしろ、このきらびやかな非日常を可能にしているシャーリーらホテルの

33 『ホテルの人びと』については、拙書、田丸（2010）109-113頁を参照していただきたい。

従業員の非人間的ともいえる生活とのコントラストを際立たせる機能を担っている。そしてすでに見てきたように、ホテルの従業員間にも明確なヒエラルキーが存在する。

主人公のシャーリーは、多くの人たちが抜け出せずにいる絶望的な運命を自ら断ち切る存在として描き出されている。もちろん現実にはそれは困難なことだったとしても、あえてシャーリーのような人物を造形したことは、ライトナーがこの作品に込めた一種の希望的メッセージと言えるだろう。

4. 今後の課題

ライトナーが描き出すアメリカの労働者は、ルポルタージュでも、小説でも、圧倒的にヨーロッパからの移民女性が多い。もしも彼女が移民だったら、そのグループに分類されるがゆえに近づきやすかっただろうし、また彼女たちにとってもライトナーは同類と映ったにちがいない。黒人女性は集団として描かれることが多く、アジア出身の女性はほとんど登場しない。ライトナーがアメリカでジェンダーによる空間の振り分けに驚いていることから、男性の労働者と知り合うのはそれほど容易なことではなかったことが推測される。

本稿の冒頭で、ワイマール共和国時代に「世界」を舞台とした旅行記を発表した三人の女性の名を挙げたが、ライトナーの旅行がアメリカ大陸に限定されるのに対し、他のふたりはアメリカ以外の国々にも足を伸ばしている。車で世界旅行をしたシュティネスはもとより、マンキョウだいもアメリカ以外にも、日本や韓国、ソビエトを訪問している。一方、ライトナーが関心をもったのは、世界というよりヨーロッパの延長としてのアメリカなのではないか。アメリカは多くのヨーロッパの人びとにとって、以前より生きるためのオルタナティブとして存在していた。たとえば、『ホテル・アメリカ』にはアイルランド出身の女性が多く登場するが、

英語を母語とする彼女たちにとって、アメリカはエキゾチックな国ではない。それはライトナーにとっても同じだ。彼女は「白人」で、それに母語のハンガリー語、ドイツ語に加え、英語、フランス語も堪能だった。

本稿第2章で取り上げたルポルタージュ『女ひとり世界を旅する』には、北米以外にも、中南米の諸国、および当時ヨーロッパに植民地支配されていた島々への旅の記録も収められている。そこでライトナーが目にするのはヨーロッパの植民地支配の厳しい現実である。北米で彼女が会ったのがアメリカに可能性を求めてヨーロッパから渡った人びとだとするなら、中南米でライトナーが目にするのはヨーロッパの残酷さ、むき出しの暴力である。つまりライトナーにとってアメリカの旅は、ヨーロッパと向き合う旅ともいえる。

今回はマリア・ライトナーのアメリカ合衆国を舞台とした作品を取り上げたが、今後は次の二つの課題に取り組みたい。第一に、同時期に発表されたアメリカを舞台とした旅行記と比較し、ライトナーの作品の特徴を明らかにすること、第二点目として、ライトナーの中南米をテーマとしたルポルタージュおよび未完の小説を分析し、彼女のヨーロッパ観および植民地主義に対する姿勢を考察することである。この二点に取り組んだうえで、最終的な目的であるライトナーの亡命時代の作品研究への足がかりとしたい。

【Literatur】

Maria Leitner 関連

Leitner, Maria (2017): *Amerikanische Abenteuer. Originaltexte von 1925 bis 1935. Episoden, Reportagen und der Urwald-Roman „Wehr dich, Akato!“*. Herausgegeben von Helga und Wilfried Schwarz. Berlin: NORA Verlagsgemeinschaft. 2017.

Leitner, Maria (1932/2013): *Eine Frau reist durch die Welt*. Hamburg: SEVERUS Verlag. 2013.

Leitner, Maria (1930/2013): *Hotel Amerika*. Hamburg: SEVERUS Verlag. 2013.

Leitner, Maria (2013): *Maria Leitner oder: Im Sturm der Zeit*. Herausgegeben von Julia Killet, Helga W. Schwarz. Berlin: Karl Dietz Verlag. 2013.

それ以外

Baum, Vicki (1929/2013): *Menschen im Hotel*. Köln: Kiepenheuer & Witsch. 2013.

Becker, Sabine (2018): *Experiment Weimar. Eine Kulturgeschichte Deutschlands 1918-1933*. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft. 2018.

Fleißer, Marieluise (1931): *Mehltreisende Frieda Geier. Roman vom Rauchen, Sporteln, Lieben und Veraufen*. Berlin: Gustav Kiepenheuer Verlag. 1931.

Giese, Fritz: *Girlkultur. Vergleiche zwischen amerikanischem und europäischem Rhythmus und Lebensgefühl*. München: Delphin Verlag. 1925.

Keun, Irmgard (1932/1993): *Das kunstseidene Mädchen*. München: Deutscher Taschenbuch Verlag. 1993.

King, Lynda J. (1988): *Best-sellers by design. Vicki Baum and the House of Ullstein*. Detroit: Wayne State University Press. 1988.

Kisch, Egon Erwin (1930): *Paradies Amerika*. Berlin: Erich Reiss Verlag. 1930.

Kracauer, Siegfried (1977): *Das Ornament der Masse*. Essays. Frankfurt a. M.: Suhrkamp. 1977.

Mann, Erika und Klaus (1929/1993): *Rundherum. Abenteuer einer Weltreise*. Reinbek bei Hamburg: Rowohlt Taschenbuch Verlag. 1993.

Stinnes, Clärenore (1929/1996/2007): *Im Auto durch zwei Welten. Die erste Autofahrt einer Frau um die Welt 1927 bis 1929*. Herausgegeben und Vorwort von Gabriele Habinger. Wien: Promedia. 2007 (1996).

有賀夏紀 (2002/2012) 『アメリカの20世紀 (上) 1890～1945年』中公新書 2012.

マシュー・グッドマン (2013) 『ヴェルヌの「八十日間世界一周」に挑む 4万5千キロを競ったふたりの女性記者』金原瑞人／井上里訳 柏書房 2013.

田丸理砂 (2010) 『髪を切ってベルリンを駆ける！ワイマール共和国のモダ

-
- ンガール』フェリス女学院大学 2010.
- 田丸理砂 (2011) 「自動車で二つの世界をめぐる——クレレノーレ・シュティエネスの世界旅行 (1927-1929)」諸橋泰樹編『2010年フェリス女学院大学学内共同研究 平和と社会正義をめぐるジェンダー表象の研究 報告書』フェリス女学院大学 2011年 51-76頁.
- 田丸理砂 (2015) 『「女の子」という運動——ワイマール共和国末期のモダンガール』春風社 2015.
- 中野耕太郎 (2019) 『20世紀アメリカの夢 世紀転換期から1970年代』岩波新書 2019.
- 松尾式之 (2000) 『民族から読みとく「アメリカ」』講談社 2000.
- 山口知三 (2006) 『アメリカという名のファンタジー 近代ドイツ文学とアメリカ』鳥影社 2006.

参照Webサイト

- Grothe, Solveig: Automatenrestaurants: Kurbel drehen, Wurst entnehmen.
In: Der Spiegel. (15/08/2013), <https://www.spiegel.de/geschichte/automatenrestaurants-kurbel-drehen-wurst-entnehmen-a-951231.html>.
(2021/01/07閲覧)
- Uhu, 1924/25, H.12, September (arthistoricum.net), <https://www.arthistoricum.net/werkansicht/dlf/73433/150/1/1> (2021/01/07閲覧)

【付記】本研究には令和二年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）の交付を受けた。